◇図画工作科

子どもが主体的に発想・構想の能力を働かせる授業

新居　奈津子・森　美香子

はじめに

昨年度まで、「クリエイティブイマジネーション（昨年度の紀要参照）が高まる学び合い活動の構成」をテーマにし、研究に取り組んだ。その結果、学び合い活動を進めることで、クリエイティブイマジネーションを高められるということが分かった。しかし、活動途中で活動とめあてにずれが生じてしまい、子どもたちの学び合いがうまく生まれなかったり、めあてに迫る活動が難しい子も見られたりした。よって、子どもたちが主体的に活動を進めながら、子どもの思いを活動のめあてに向かわせることができるような導入を考えることが課題として見えてきた。

そこで、今年度は、これまでの学び合い活動を活かしつつ、もう一度、個の学びに焦点を当てることで、テーマを「子どもが主体的に発想・構想の能力を働かせる授業のあり方」と設定し、授業を始めるまでと授業の導入時に大切にしたい視点について、研究を進めていくことにした。

１．研究テーマについて

（１）学びを創り続ける子ども

本校図画工作科では、自ら対象に働きかけ、気づき、思いを膨らませ、学びをくり返す中で、自分の表したいことを形や色などを通して表す子どもの姿を目指している。

子どもたちは、材料・用具に自ら関わりながら、「いいこと考えた。」「こうしてみたらどうかな。」と考えついたことを試し始め、自分なりの意味や価値を見出しながらイメージを広げていく。そして、自らの気づきや発想・構想に加え、友だちとの学び合いやこれまでの経験を活かしながら、子どもたちは学びを創り続けていると考える。また、この学びは１つの題材のみに留まるのではなく、題材を超えて発想・構想の能力や創造的な技能として発揮される。

（２）授業のはじめの重要性

題材、材料・用具との出合いにおいて、「こんなことをやってみたい。」「こんなことができそうだ。」という発想・構想の能力を働かせ、学びを創り始めなければ、以降の学びを創り続けるにはつながらない。考えることとつくることをくり返す図画工作では、１つの学習活動のはじまりにおいて、この発想・構想の能力を働かせることが重要である。しかし、授業では、実際に活動が始まると、教師と子どもは、１対１の対応になる。そこで、多くの子どもが活動を進めるのが困難になる問題に直面したり、子どもの活動がめあてと大きくずれていたりする場合には、授業を止めて提案し直したり、多くの子どもに個別に関わったりするなどの修正を加えることが必要になる。これは、子どもの主体的な意識にも影響を与えてしまう。つまり、すべての子どもに同じ時期に、同じ情報を提案することができる導入時が非常に重要であり、その成否が子どもの学びを創り始められるかどうかを決めると言っても過言ではないと考える。

しかし、学年によって子どもの発達の特性が異なるため、それに則した授業のはじまりを考える必要がある。そこで、発想・構想の能力と子どもの活動のつながりを、低・中・高学年で分けて捉え、それぞれのつながりを認識したうえで、授業のはじまりを考えられるようにした。

２．発想・構想の能力と子どもの活動のつながり

（１）低学年

【図 8-1　高く積もうとする子ども】

低学年の子どもは、材料などに自ら働きかけ、表したいことを見つけ、それを表す方法を考えながら、また材料などに働きかけるという、行きつ戻りつする姿を見せながらイメージを膨らませる。図８－１は、１年生の「ならべて　ならべて」で、自分の身長より高く積もうとしている子どもの姿である。いろいろな形や大きさの箱があることに喜んだ子どもたちは、活動内容を知ると、ドミノのように箱を長く横に並べたり、自分の周りを囲うように並べたり、高さを求めて上へ上へと並べたり（積んだり）し始めた。初めの数個は簡単に積むことができたが､高くなるとバランスが悪く崩れることがあった｡崩れても活動を続ける子どもたちは、いつの間にか「自分たちの背よりも高く積まれた箱」をイメージしていた｡「もっと高くしたい」という思いを達成するために、図８－１の子どもたちは、下の方は大きな箱、上へ行くほど小さな箱にすることや、同じ大きさの箱を柱のようにすることで、安定させることを考え出した。このように、発想・構想とつくることが非常に密接な時期である。

（２）中学年

【図 8-2　途中鑑賞】

【図 8-3　班の活動】

中学年の子どもは、発想・構想とつくることが密接である低学年に比べ、ある程度対象との間に距離をおいて、自分の作品を鑑賞したり考えたりすることができるようになる。そして、自らの作品について気づいたことを活かして活動することができるようになる。また、周りとの関わりも活発になるので、友だちの活動や作品のよさを、自分の活動に活かしながら表し方を工夫していくことができる。図８－２・３は、３年生の「ポリ袋を切ってつないで」という題材における子どもたちの様子である。図８－２の子ども２人は、途中鑑賞の際、自分たちとは違ったつなぎ方をしている班のところで足をとめた。そして、まっすぐ長くつないでいる自分たちの班にも､この枝分かれしたつなぎ方を活かそうと話し､自分の班へと戻っていった。その後の活動が図８－３である｡枝分かれしたつなぎ方が生き物の手のように見えた子どもたちは、顔の部分を三角に切り、自分たちらしい作品をつくることができた。このように、自己の作品鑑賞と友だちの活動や作品のよさをうまく活かしながら、自分らしい発想・構想をして活動していくことができる時期である。

（３）高学年

【図 8-4　見通しを確かめる子ども】

高学年の子どもは、中学年の子どもたちに見られる自己の作品鑑賞と友だちの活動や作品のよさをうまく活かすことに加えて、自分の表したいことや活動についての見通しを持つことができるようになる。その結果､「以前の題材で、こんな発想・構想をしている子がいたから、今回の題材で、自分はこんなふうにしてみたい。」「以前の題材で、この材料・用具を使ったら、こんなことができたから、今回もこの材料・用具を使ってこんなことをしてみたい。」というように、それまでの学びを活かして見通しを持つことで、発想・構想の能力をより働かせることができる。図８－４は、５年生の「集めてならべて重ねて」で、広告のピザを切り集め、自分の見通しを確かめている姿である。活動が進むうちに、もっとおいしそうに見せたいと思い、絵の具を使って、ピザを焼く窯から取り出したときの絵にしようと考え出した。このように、見通

しを持つことができることで、表したいことや伝えたいことを考え、発想・構想の能力を働かせてよりそれが伝わる材料・用具などを選びながら活動することができる時期である。初めの見通しどおりに作品をつくるのではなく、活動が進むうちに、はじめの見通しを超えた作品へとつながっていくこともよくある。

３．子どもが学びを創り続ける授業のはじめ

主体的な発想・構想の能力を働かせて、はじめて子どもの学びが創り始められる。主体的に発想・構想の能力を働かせることを支えるために、授業の導入時はもちろんのこと、授業を始めるまでの準備段階も非常に大切である。そこで、「授業を始めるまで」と「授業の導入」を授業のはじめと捉え、以下の視点で授業づくりに取り組んだ。

（１）授業を始めるまで

①魅力ある題材の開発

私たちのまわりにあるさまざまなものが材料となり、教材化することができる。その際、教師は、子どもたちの日常の興味関心の対象や、それまでに創り出してきた学びと課題を把握し、子どもに適した題材を開発することが大切である。考えた題材が、創造的な技能や、実態に則しているかどうかも考えなければならない。なぜなら、それぞれの子どもの発想・構想の能力を働かせた活動を保障することにつながるからである。

②題材名の工夫

題材名は、活動内容を知り、活動の見通しを持つうえで、子どもたちにとって大切な情報であり、導入時の活動意欲が高められる。造形遊びの題材名は、子どもたちがその題材での行為を知るとともに、活動のめあてにもつながる分かりやすいものにする。例えば、１年生の造形遊び「コロコロころがあれ」では、転がる材料に働きかけることから始まる題材であるということを示した。自分のイメージ通りに転がってほしいという思いを込めて「コロコロころがあれ。」と言いながら坂道に作品を転がした。話し言葉を題材名にすることで、子どもの思いとめあてがずれることなく活動を進められると考えたからである。その結果、転がる仕組みから思いついた形や色を工夫しながら、発想・構想の能力を働かせることができた。活動が進むと飾りを付け過ぎて転がらなくなった子がいたが、題材名を通して、転がるしくみから思いつく活動であるということを確かめ、その後もめあてに迫る活動を進めることができた。

絵や立体、工作では、「自分ならどんなふうに表すだろう。」「こんなことを考えながらつくりたいな。」というように、一人ひとりのイメージや思いを膨らませることができる題材名にする。例えば、３年生の絵に表す活動「とびらの向こうに〇〇が見えるよ」では、真っ白の画用紙の扉を開閉しながら〇〇にあてはまる言葉を考えることで、子どもたちは、自分のイメージを持つことができた。

③環境設定の工夫

どこに、何を、どれくらい準備するのかは、子どもたちが、発想・構想の能力を働かせながら活動するうえで大切である。材料を考える際には、材料の特徴（よさと限界）を教師が知っておく必要がある。子どもたちが活動を広げることができたり、子どもの活動に則した材料・用具を準備しておいたりすることができると考えるからである。

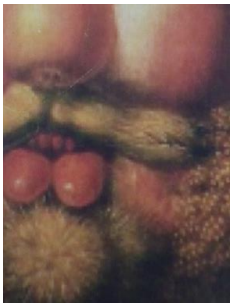
【図 8-5　床で活動する子どもたち】

また、活動の場所も図工室、階段、廊下、運動場、体育館などいろいろと考えられる。子どもが十分に材料と関わることができる広さや、学び合い活動が生じやすい空間づくりなどを工夫する。

例えば、１年生の題材「はさんでつないで」は、いろいろな形に切られた段ボール片を、洗濯ばさみでつないでいく活動である。この際、子どもたちが十分に段ボール片と関わることができるように、いろいろな形に切った段ボール片を、４５Ｌのビニール５袋分準備した。また、活動が進むうちに、部屋の中だけでなく、廊下や階段でも活動する子もいるだろうということを考え、２時間続けて活動することができる教室や廊下、階段を活動場所に選んだ。机がない方が、空間が広くて活動しやすいので、机は全て教室の端へ寄せた。その結果、子どもたちは、段ボール片の形や大きさに気づきながら長くつなげてわかれ道をつくったり､何かの形に見立てながらつなげていったりと、材料と精一杯関わりながら、発想・構想の能力を働かせることができた。

（２）授業の導入

①題材との出合いの場の工夫

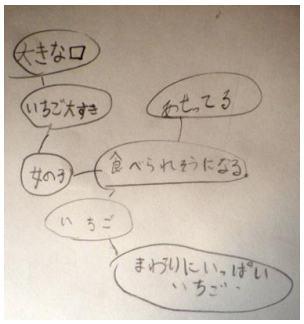


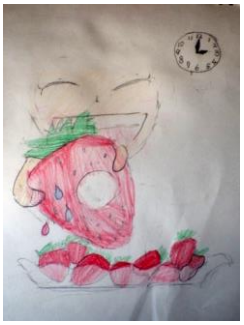
【図 8-6　拡大】

【図 8-7　全体像】

題材との出合いが魅力的であるかどうかで、その後、主体的に発想・構想の能力を働かせることができるかどうかが左右されることさえある。題材や材料と子どもが、どのように出合うかが発想・構想の能力を高める上で大切である。５年生「集めてならべて重ねて」では、図８－６のように、実物投影機を使って、資料の一部分を拡大して子どもたちに見せた。「栗。」「サクランボ。」「落花生。」などと言っている子どもたちの様子を見ながら､少しずつ全体像（図８－７）を見せた。すると、「えー、人や。」「全部食べ物でできてる。」などという反応が聞かれた。子どもたちは、この活動に興味を持つとともに、活動内容を容易に理解することができ、見通しを持って発想・構想の能力を働かせることができた。

②自らの発想・構想を具体化できる場の工夫





【図 8-8　言葉と絵で自分のイメージを表す】

子どもたちにとって、めあてや活動内容が分かっても、表そうとするイメージが曖昧で発想・構想の能力がうまく働かないことがある。子どもたちが、曖昧な中にある自らのイメージを、教師や友だちと話しながらはっきりさせ、発想・構想の能力を働かせることができるようにイメージを言葉や絵でかいたり試しにつくってみたりするという場の保障が必要である。図８－８は４年生の題材「へ～んしん」で、段ボールに穴をあけ、そこに顔をはめることで自分が一瞬にして変身できるという題材である。この子どもは、食べられるいちごになりたいと思い、いちごとそれを食べる女の子のイメージを言葉と絵で表しながらはっきりとしたものにしていった。

また、これらすべてを１人で行うのではなく、友だちと対話することで、さらに発想・構想の能力が働くと考える。班などの複数人で対話できるような場を保障し、自然と子どもたちが対話しながら活動できるような場を工夫する。そうすることで、１人では思いもつかなかったことが、友だちとの対話がきっかけで自分の表したいものをより具体的に考え、発想・構想の能力を働かせることができるからである。図８－８の言葉には、食べている時刻のことは書かれていないが、友だちの、「これ、いつ食べられているの。」という質問に、３時のおやつのときにしようと思い、それが伝わるように時計を描くことを考え出した。

このような場を保障することが、活動への安心感を生み出し、さらなる発想・構想の能力を働かせることができると考える。